入学試験問題

国語

函館ラ・サール高等学校

２０２４年２月１５日

〔問題一〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

外見とはどのようなことを意味するのでしょうか。A ジギ通り考えれば、「外」から見える人の姿ということでしょうか。「外見を気にする」とは、まさに見た目で判断される自分の姿、自分への評価に敏感になるということです。誰がどのように考えようと自分は自分だとも言えますが、そう簡単なことでもなく、私たちは常に「他者からの視線」に対抗する〝術〟を考え、実践しているのです。そして私たちが日常の差別や排除を考えるとき、外見という問題もまた重要な手がかりです。

人間は外見や見かけではなく、その中身が大事だ、という考えを否定する人はまずいないでしょう。そうでありながら同時に私たちは普段、いちいち目の前にいる他者の〝なかみ〟や〝こころ〟を気にして、生きているわけではありません。他者の「内実」ではなく、他者の「外見」をもとにして、その場その時に応じて、目の前の相手が何者であり、どのように対応すれば適切であるかを瞬時のうちに判断し、実践しているのです。だからこそ、外見を考えることは、日常における他者との出会いや他者理解を考えるうえで、とても重要な営みだと言えるでしょう。「①たかが外見、されど外見」なのです。

「されど外見」を考えるとき、私たちは普段、他者とどのように向きあっているのかをじっくりと見つめる必要があります。そしてこれは、ゴフマンという一風変わった社会学者が生涯テーマとした「共在＝他者とともに在ること」を考え、そのありようを解読する営みと密接に関連しています。ゴフマンは、人間が他者と共にいる営みや複数の人間からできる集まりには、それ自体固有の秩序がつくられ維持されているという事実を明らかにしています。

たとえば、私たちは電車に乗っている時に、どのような秩序を維持しながら過ごしているのでしょうか。私がまず思いつくのは②「他者はじっとみつめない」というルールです。Ⅰどんなに目の前の座席に座っている人がⅡ魅力的であろうと私はその人をじっと見つめたりはしません。でもⅢやはり気になる時は、その人だけを注視するのではなく、他の光景も眺めているふりをしながら、それとなく見るでしょう。ゴフマンの言葉を借りれば、それは「焦点をあわせない」見方であり、こうした秩序が維持されているのは「焦点をあわせない人々の集まり」であり、電車のような公共的な空間で典型的にみられる現象です。つまり私に限らず乗り合わせた多くの人は、電車の中では、特定の誰かに焦点をあわせないで、焦点をぼかしながら、周囲の乗客の姿や様子を見るともなく見ているのです。

さらに言えば私たちは、他の乗客との〝距離〟をⅣ絶妙に保ちながら、自分の場所を維持しつつスマホに熱中したり音楽を聴いたり本を読んだりしています。ゴフマンに言わせれば、新聞や週刊誌や本は、他者との〝距離〟をとり、〝距離〟を保っていること、言い換えれば自分は他者に対して関心はないし、他者という存在へ関与するつもりもないことを周囲の他者に表示するための「道具」なのです。もちろん今はスマホこそ最適な「道具」です。

ただこうした視線の取り方や「道具」が通常に機能して電車内の秩序が維持されるとしても、それが危うくなる状況はいくらでもB起こり得ます。

満員電車に乗って、私はいつも気になり、どうしようか困ってしまうことがあります。それは隣に立っている人や席に座っている人が熱中するスマホの画面が「見えてしまう」ことです。見たくなければ目を閉じればいいだけですが、満員で身動きもままならないとき、目を閉じ続けると不安定な状態になるし、Vさりとて他に視線を移そうとすれば、そこでも別のスマホの画面が見えてしまいます。見たくもないものが、まさに「見えてしまう」のです。

③でもなぜ私は困ってしまうのでしょうか。先に述べたようにスマホは使用している人にとって、満員電車という人間が充満した異様な空間で、自分の世界に閉じこもることができる有効な道具です。それは同時に他者に対して関心もないし関与もしないことを示す道具でもあります。イヤホンで音楽を聴き、スマホの画面に目を落としてゲームやＬＩＮＥのやりとりに集中している姿。それは周囲の世界や外界に対して耳も目も遮断し、自分だけの世界に集中している姿を周囲に表示していることになります。「表示する」と書いたのは、もちろんスマホに熱中するとしても、Ⅵその人は完全に他の乗客や外界の音や様子を遮断しているのではなく、聞こうと思えば聞けるし、見ようと思えば見えるからであり、そうした外界との繋(つな)がり方を意味しています。

さきほど電車内で人々が適切に〝距離〟を保つことが電車の秩序にとって重要だと述べましたが、満員電車のように〝距離〟すら保つことが困難な場合、私たちはどのようにして自分を守り、自分と他者との繋がりを維持しようとするのでしょうか。ゴフマンの発想を借りて、私はこう考えます。

私たちは、自分を守る〝膜〟とでもいえるものを持っています。それは状況によって堅牢(けんろう)な〝C殻〟となるかもしれませんが、薄く、破れやすく、誰の目にも見えない透明な〝膜〟です。そして満員電車のように人間が過剰に密集してしまうとき、当然〝距離〟の維持は難しく、さらに〝膜〟さえもお互いに触れ合い、擦りあわせることで、破れてしまう危険に私たちはさらされます。そのような状態のなか、私たちは、スマホなど使える「道具」をDクシして、互いの〝膜〟を

破る危険を回避できるよう細心の注意を払っているのです。

私が困ってしまうのは、隣の他者の〝膜〟をなんとか破らないように注意を払い、その場でいろいろとふるまっても、〝膜〟の向こうにある他者の世界が「見えてしまう」からです。ＬＩＮＥのやりとりや個人で検索している情報やゲームの様子など、別に私は見たくありません。結果として隣の人が懸命に維持しようとしている〝自分だけの世界〟を「侵犯」してしまう危うさを感じるからなのです。

自分の〝膜〟を守りつつ、他者の〝膜〟つまり、他者の私的世界を侵犯しないこと。これこそ、私たちが日常しっかりと守っている最大の儀礼（エチケット）と言えるでしょう。そしてこの儀礼を行使することに外見が密接に関連しています。

自分の〝膜〟を守りつつ、他者の〝膜〟つまり、他者の私的世界を侵犯しないという儀礼は、さらに私たちがその場そのときに応じて適切に④自分の〝外見〟を整えることで達成されます。

たとえば私は、電車で空いている席を見つけると、座る前に必ず「すみません」と両側に座っている人に声をかけるか片手を少し前に出して「これから私がそこに座りますよ」という意思表示をします。両側の人のコートや上着の裾を尻で踏まないように気をつけながら座り、リュックは両腕で覆うようにして抱え、膝の上でしっかりと安定させます。ここまですれば、自分の〝膜〟はしっかりと守れるし、両側の人の〝膜〟にも触れないし、私的世界にも「侵犯」する危険性はなく、ほぼ完璧な〝乗客としての外見〟を私はつくりあげることができます。そしてこうした外見をつくりあげた後で、今日の講義で使えそうな面白いネタはないかと、どこに焦点をあわせることもなく、乗客の様子を細かく観察しています。

状況に応じて必要だとされる外見を整えること。この営みは、ほとんど誰もがＥ逃れえないものと言えるでしょう。でもなぜそのような営みを私たちはしてしまうのでしょうか。これもゴフマンから得た私の知識ですが、私たちは常に自分の姿をめぐりその場その時の状況に適合するように印象操作しています。それはただ姿かたちという外形的なことだけではありません。自分自身がどのような存在であるかを相手にわからせようとする自分の中身にまで関わっていく印象操作という営みです。

いずれにしても、私たちは表現したい自分の姿があり、それをうまく伝えることができるよう、化粧やファッション、身体の加工などいろいろと工夫し、自らの外見を整えながら生きています。またすでにおわかりのように、私は「外見」という言葉を単に衣装や化粧などで自分の顔や身体をＦヒョウソウ的に整える営みだけを含めているのではありません。そうした営みだけでなく、さまざまな状況で、その場を構成するメンバーとして〝適切に〟ふるまうための「処方箋的な

知」やふるまい方も含めています。なぜなら私たちの多くは、自分の人間性や内実などと関係なく、その場の秩序にあわせ〝適切に〟ふるまうことができるからです。

さて私たちは、いろいろな場面で異質な外見と出会い、驚くことがあります。

電車のホームでよく見かける若い男性がいます。彼は、ホームの先端で何かしゃべりながら待っており、電車が到着すると何かを指示しているかのように大きな声をあげ、電車が発車すると、車両を最後まで見送り、手を伸ばして何かの指示をし、ぶつぶつとしゃべったのち、満足したようにホームの中央までもどってきます。また電車の車両の中をけっこう大きな声でしゃべりながら先頭部まで歩いていく人もいます。その人は電車が駅に停車すれば、先端部のドアがあくと、いったんホームにおり、客の乗降を確かめるような仕草をしたのち、発車のベルが鳴れば、また車両に戻り、次の駅まで何かをしゃべっているのです。あたかも自分がG車掌をしているかのようにも見えます。

こうした人の姿は、駅や電車内では明らかに異質の外見であり、一瞬私たちは驚くでしょう。しかしすぐにこの異質の外見にある〝解釈〟を与えることで、驚きは収まります。「電車好きの、電車に強いこだわりがある知的障害のある人なのだな」という解釈です。もちろん、この解釈が目の前にいる人を正当に理解できているかどうかについて確たる証拠はどこにもありません。しかし、こうした〝解釈〟を下すことで、ホームや電車内にいる乗客の大半は再び自分自身を〝適切な乗客〟として保ち続けることができると言えます。

異質な外見と出会った瞬間、私たちは自分の世界を守っている〝膜〟が脅かされるのではという危うさを直感し驚きます。でもそれがこれまで何度か見たことがあったり、知り合いから聞いていた話であったりして、〝見慣れた異質さ〟であり〝見慣れた外見〟であると判断できれば、〝膜〟への侵犯というリスクは一気に低減し、その〝外見〟を、余裕をもって眺めることができるようになります。

つまり日常生活における場面や状況を〝適切だ〟と了解できる「普通」の知には、さまざまに異質な外見と出会ったとき、どのように判断しふるまえばいいのかをめぐる〝処方箋〟がけっこう豊かに含まれています。ただそれらは異質な外見の他者という人間をしっかりと理解したうえで、できている〝処方箋〟であるかどうかは怪しく、まさに常識的な「思い込み」や「決めつけ」に囚(とら)われた実践知にすぎないことが多いのです。結果的に、それらは異質な外見から距離がとれ、結果として⑤自分の〝膜〟を安全に守れるという点でのみ意味があるものといえるでしょう。

こうした〝処方箋〟としての知自体にはらまれている「決めつけ」や「思い込み」の妥当性や適切さを問い直すことなく、異質な外見からただ距離をとり、自分の〝膜〟を懸命に守っているだけでいいのでしょうか。そうした知は、確かに知が作動した瞬間、自分の〝膜〟が破られるのを防ぎ、自分の私的世界が脅かされるのを防ぐという意味で有効ですが、他方で、それらは外見も含めさまざまな「ちがい」をもった他者と出会い、他者とともに生きるチャンスを拡げ、〝処方箋〟自体に含まれる知を根底から見直し、⑥より豊かな知へと変貌させる可能性を奪っていると言えるのではないでしょうか。

（好井裕明『他者を感じる社会学』より）

（一）　線部A「ジギ」、D「クシ」、F「ヒョウソウ」を漢字に改め、C「殻」、G「車掌」の読みを平仮名で答えなさい。

（二）　線部Ⅰ「どんなに」と、Ⅱ「魅力的であろうと」の関係として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　主語（部）・述語（部）の関係　　イ　修飾語（部）・被修飾語（部）の関係
ウ　接続の関係　　エ　並立の関係　　オ　補助の関係

（三）　線部Ⅲ「やはり」、Ⅳ「絶妙に」、Ⅴ「さりとて」、Ⅵ「その」の品詞名として最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはいけません。

ア　動詞　　イ　形容詞　　ウ　形容動詞　　エ　名詞
オ　副詞　　カ　連体詞　　キ　接続詞　　ク　感動詞

（四）　線部B「起こり得」、E「逃れえ」と同じ活用形のものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　空には黒い雲が垂れ込めている。　　イ　去年の今頃のことを思い出す。
ウ　犬は庭を駆け回るのが好きだ。　　エ　じっくり話し合おう。
オ　毎日運動すれば、健康になる。　　カ　隠された財宝を探し当てろ。

（五）　――線部①「たかが外見」とありますが、これはどのような考えに基づいて言っているのですか。その考えを本文中から三十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。ただし、句読点も字数に含めます。以下の問題も同様です。

（六）　――線部②『他者はじっと見つめない』というルール」とありますが、これは何のためのルールですか。「～のルール。」につながるように、本文中から五十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

（七）　――線部③「でもなぜ私は困ってしまうのでしょうか」という問いの答えを次のようにまとめました。［　　］に当てはまる表現を本文中から十字で抜き出して答えなさい。

他人のスマホの画面を見てしまうことが、［　　］することになるから。

（八）　――線部④「自分の〝外見〟を整える」とありますが、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　他人が近くにいる時、相手に嫌悪感を抱いていることを悟られないようにする。
イ　他者の私的領域に触れそうになった時、敵対するつもりはないことを相手に示す。
ウ　他人が隣に座った時、相手に踏み込まれたくない自分の領域があることを示す。
エ　他者の私的領域に触れた時、関係を生じさせるつもりはないことを相手に示す。

（九）　――線部⑤「自分の〝膜〟を安全に守れるという点でのみ意味があるもの」とありますが、この例として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　快適に働けるような環境を保つために、夏にはクールビズを採用していると外部に示すこと。
イ　不機嫌な人には話しかけないようにして、怒りの矛先が自分に向けられないようにすること。
ウ　食品会社が、髭（ひげ）を伸ばしている人を採用しないことによって、衛生的だというイメージを保つこと。
エ　公園で遊んでいる時、遊具で危険なことをする人とは遊ばないことで、自分の安全を確保すること。

（十）　――線部⑥「より豊かな知へと変貌させる」とはどういうことですか。最後の形式段落の言葉を用いて、三十字以内で説明しなさい。

〔問題二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

園田栄造（そのだえいぞう）は七十歳の靴職人で、六階建ての建物の一室をアトリエとしている。最近は納得できる靴が作れず、いらだっていた。この建物には栄造のアトリエのほかに絵画教室などがあるが、栄造は誰とも交流を持たなかった。

小学六年生の川畑隼人（かわばたはやと）は、絵画教室に通う弟直也（なおや）を迎えに来ていたが、いつも栄造のアトリエの前で直也を待っていたことから、栄造と少しずつ言葉を交わすようになり、直也を迎えに来る日以外も栄造に会いに来るようになった。そして、栄造は隼人以外に、料理教室の講師のワルター、彫刻教室の講師の徳永といった人々とも次第に話をするようになっていった。

栄造の力量をよく知る小池に、イギリスで開かれるコンテストへの出品を持ちかけられた栄造は、出品することを引き受けたものの、うまく作れないでいた。そんな中、ワルターの靴も同時に作ることになり、栄造は先にそれを作りあげた。

栄造はタバコをくわえながら靴を撫（な）でた。自然と鼻歌が出る。久し振りにそこそこ満足のいく靴ができた。靴を作る楽しさを思い出した。顔がにやける。綿の布で磨く。つま先の丸みはａ完璧だ。外羽根の立ち上がり位置はややトウ部分に近づけた。大きなサイズの靴はややもすれば間抜け顔になるので、デザインも少しいじらないといけない。紐穴（ひもあな）の間隔も通常より大きくした。これで引き締まった顔になる。

きゅっきゅっと足音をさせて隼人がｂ現れた。

冷蔵庫へ行こうとした隼人が靴に気づき、声を上げた。「わっ、ワルターさんの靴？」

「そうだ。どうだ、でかいけど、とんまな顔してないだろ？」

「格好（かっこう）いいよ」

「そうか？」

興奮したように［Ａ］その場で跳ねた。「うん。すっごく」

「まぁな」

ノックの音と同時においしそうな匂いがやって来た。

「失礼します」ワルターがゆっくりと歩く。「チーズケーキ食べませんか？」隼人に差し出した。

ふわっといい香りを栄造は嗅いだ。

「食べる。ありがとう」隼人は喜んだ。「ワルターさんの靴できたんだよ」

「本当？　できましたか？」
「おう、ちょうど良かったよ。ちょっとこれ履いてみてくれ」栄造は靴を差し出す。
「わぁお」椅子に座って靴を履く。「栄造さん、すっごい、最高」親指を立てた。
「あんたに礼を言わなきゃなんないんだ」栄造は言った。
「私に？」
「そう。あんたの知り合いの八十のババアが手で靴を作ると聞いて――そんなこと考えられなかった。年取ると指に力が入らなくてね。今は機械で作るから、それだったら八十でも靴を作るのは可能だ。だが手だと無理なんだ。だけどあんたはいい靴だという。そんなバカなことを。それで久し振りにあんたの靴をミシンを使わずに作ってみた。何度も糸を切ったよ。それで思い至った。力が衰えたと感じてるもんだから、必要以上に強く引っ張っているんだって。それで無理をしないでやってみた。緩めるような感覚でね」恥ずかしくて目を逸らした。「そしたらいい靴ができたよ。緩みのあるお陰で、足に早く馴染むはずだ」
「栄造さんの役に立ちましたか？」
「あぁ」
両手を胸に当てて、感激したように首を小さく左右に振った。「良かった」
隼人が皿とフォークを手にして言った。「栄造さんの靴はこれから世界一になるんだよ」
「世界一？」ワルターがブルーの目で栄造を見つめる。
「そう。これからコンテストに出す靴を作るんだよね？」隼人が確認するように尋ねた。
①栄造はじっと隼人を見つめる。
隼人はカレンダーの前まで歩き、印をつけた日を指差した。「この日が締め切りだよ」目を輝かしている。
あと二週間か。栄造は頭のなかでざっと計算した。ミシンを使うなら簡単だ。三日でできる。しかし一部を手縫いにすると、二週間でできるか自信がない。ワルターの靴はまぐれでできた可能性もあるし。間に合うか――出してみるべきだろうか。
「楽しみですね」ワルターは言った。「まず、私のチーズケーキを食べてください。」
「明日から靴を作りはじめると思います」隼人は小池に言った。

「二週間あれば大丈夫だな」電話の声は弾んでいた。
「でも栄造さんは時間を心配していました。手で縫うそうで――二週間はギリギリって感じみたいです」
「えっ？　手で？　そっか。実はね、ちょうど出張でロンドンに行くことになって、直接持ち込もうかと思ってたんだ。それだと二十六日におじさんに渡してもらえればいい」
「栄造さん助かるかもしれません。言っておきます」
「栄造さんのこと、頼むよ」
「はい」
隼人は小池から栄造のことを頼まれて、誇らしかった。

（中　略）

栄造は聞きなれない足音に手を止めた。
「栄造さん」固い声で隼人が言った。「弟の直也」
「チビガキか。今日は絵画教室ない日だろ？」
「これから締め切り日まで、毎日ここに来たいんだ」
「俺を監視しようってのか？」
「そういう約束してるし」
「約束？　誰と？」
「なんでもない」隼人は横を向いた。
「小池だな？　お前、小池と組んでたな？」
「組んでないよ」
「じゃ誰となんの約束したのか言ってみろ」
②ばつが悪そうな顔をした。「ごめんなさい」
ちょっとばかりショックだった。隼人が小池と組んでいたとは。俺だけのけ者だったのかよ。つれないよな。「小池から頼まれたのか？」
「違う。僕がそうするって言ったんだ。僕が毎日ここに来ると、直也が家で一人になっちゃうから連れて来てもいいかな？

おとなしくしてるよな？」
　直也が隼人の顔を見上げてから答えた。「うん」
「しょうがねぇな。ま、いいよ。チビガキが来ると思ってなかったからコーヒーゼリーなんて大人のデザート買ってきちまったぞ。苦かったら残せ」
「ありがとう」隼人は吐息をついた。
「失礼します」
　声の主はワルターだった。
「なんだ？」栄造は声をかけた。
　ワルターの後ろには徳永もいた。
　ワルターが言った。「追い込みですね。手伝えることないでしょうか？」
「手伝う？　靴を？　なに言ってんだ。C素人が手だしできることはないよ。それになんでいっつもあんたがセットでついてくんだ？」
　徳永がにんまりとした。「よろしいじゃないですか。片付けでも、あれ持って来いでも構いませんですよ、はい」
　いったいいつからこんなに大勢のヤツらが出入りするようになったんだ。栄造は頭を抱えた。しょーがねぇなぁ。俺がアトリエ内を歩けば、住人たちは視線を合わさないようにすれ違うのが決まりだったのに。尻がB　する。人と一緒になにかをするのは苦手だ。自分の思い通りにならなければ腹が立つだけだからだ。なのにこいつらは手伝うという。はっ。靴が台無しになる。③少し前だったら侮辱されたと怒り狂うところだ。しかし今は気持ちだけは受け取れる。なんでかな。
　栄造は言った。「あんたたちの気持ちは嬉しいんだがな。オーダー靴は分業ではできないんだ。だから――」
「わかりました」徳永が言った。「それでは、道具の整理、仕事場の掃除、電話の取り次ぎ、食事の手配――そういったことで手伝わせていただきます」
「あっ？」
「もちろん隼人君の許可を得てね。わからないことがあったら隼人君に聞きますから。栄造さんは靴作りだけに専念してください」
　栄造はため息をついた。

（一）　線部ａ「完璧」は故事成語です。その故事成語の元になった漢文の一節を読んで、後の⑴、⑵に答えなさい。ただし、返り点と送り仮名を省略した部分があります。

恵文嘗得楚和氏璧。秦X昭王、Y請以十五城易之。（『十八史略』より）

［現代語訳］**趙の国の恵文王は、かつて楚の国の和氏の璧という宝玉を手に入れた。秦の国の昭王は、十五の城とこの宝玉を取り替えようと申し込んできた。**

⑴　〰〰線部Ｘの中で述語はどれですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　嘗　　イ　得　　ウ　楚　　エ　和氏　　オ　璧

⑵　〰〰線部Ｙの書き下し文は「十五城を以て之を易へんと請ふ」です。これを参考にして解答用紙の白文に**返り点**を施しなさい。なお、送り仮名は不要です。

（二）　═══線部ｂ「現」を次の（例）の□に入れると、「実現」「再現」「現象」「現在」の熟語ができます。これを参考にして次の⑴～⑶の□に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

（例）　象 → 実 → 現 → 在　　再 → 現

⑴　学 → 輸 → □ → 力　　突 → □ → 力

⑵　力 → 安 → □ → 身　　万 → □ → 身

⑶　用 → 権 → □ → 益　　有 → □ → 益

（三）　═══線部ｃ「素人」の対義語を、漢字二字で答えなさい。

（四）　A　に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　くるくると　　イ　ぴょんぴょんと　　ウ　ちょこんと　　エ　ぽんと

（五）　――線部①「栄造はじっと隼人を見つめる」とありますが、この時の栄造の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ワルターの靴で手応えを感じたこともあり、隼人の言葉をきっかけにコンテストについて改めて考え始めている。
イ　コンテストの靴のことはすっかり忘れていたが、隼人の言葉で締め切りが近いことに気づいて焦り始めている。
ウ　納得のいく靴をようやく完成させることができたので、今度はコンテストで優勝したいと思いをめぐらせている。
エ　優勝できるような靴を作るのは簡単ではないということを、隼人にどのように理解させようかと思案している。

（六）　――線部②「ばつが悪そうな顔をした」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　栄造を見張るつもりだったことを知られてしまい、それをうまく説明できなかったから。
イ　小池と組んで栄造をのけ者にした結果、栄造の怒りを買うことになってしまったから。
ウ　自分の発言に対して栄造に次々と問い返された結果、追い詰められてしまったから。
エ　自分なりに手伝おうとしていただけなのに、栄造にひどく叱られてしまったから。

（七）　B　に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ぴりぴり　　イ　もぞもぞ　　ウ　じりじり　　エ　うずうず

（八）　――線部③「少し前だったら～受け取れる」とありますが、この時の栄造の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　かつての自分が誰かに手伝いを申し出られたならば、職人としての力量をみくびられたと感じただろうが、今は他人の気遣いを素直に受け入れられるようになった。
イ　以前の自分なら一人でいることを好んで、他人のことは迷惑にしか感じなかったはずなのに、今は手伝ってくれる仲間の存在をありがたく思えるようになった。
ウ　手伝いの申し出のような優しい言葉にはきっと裏があると、かつての自分なら疑っていたはずなのに、今は他人の好意を素直に受け止めることができるようになった。
エ　誰かに手助けを申し出られても、以前の自分なら年寄り扱いをされたかのように思えて素直に受け入れられなかったのに、今は他人の好意に甘えられるようになった。

〔問題三〕次の文章は、前問の本文の続きです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

栄造がトイレから出ると、ロビーに集まっていた人たちが一斉に動きを止めた。まるでだるまさんが転んだみたいだ、と栄造は思った。そんな所にいたって役に立たないってのに。

栄造はギャラリーたちにはなにも言わず、仕事場に戻った。

隼人と直也が指示通りに布で靴を乾拭(からぶ)きしている。

二人に声をかけた。「おう。どうだ？　輝いてきたか？」

「どお？」隼人が靴を栄造に見せた。

「どれ。よし、いいぞ。そっちはどうだ？」栄造は直也から靴を受け取った。「よし。これで完成だ」

「本当？」直也が言った。

「間に合ったね」隼人がほっとしたように言った。

栄造がしみじみと言った。「そうだな――おい、どこ行くんだ？」

隼人と直也は走って部屋を出て行った。

④なんだよ。栄造は席を立ち、伸びをする。タバコに火をつけて一つ大きく吸う。うまい。うぉっー。できた。一度は諦めかけていたが、完成させることができた。隼人と直也のお陰だな。いや、そんなこともないか――やっぱりそうかもな。

異様な気配がして振り返った。狭い部屋にぞくぞくと人が入って来る。ロビーにいたヤツらだ。

集団のなかから隼人と直也が姿を見せた。小池の腕を摑(つか)んで進み出た。

「見て。これだよ」隼人が自信たっぷりに言った。

小池は台上の靴を眺めた。「触ってもいいですか？」d恍惚の表情を浮かべる。「完成ですね」

「あぁ」

「ありがとうございます。これで間に合いました。明日、これを持ってロンドンに行って来ます」

パラパラッと拍手が起こり、それは大きくなっていく。

「なんだよ」栄造は首を左右に振った。「拍手なんてすんなよ。靴職人が靴作って拍手貰(もら)っちゃしょうがないっての」小池に向かって小声で言った。「結果だけどさ」

「はい。三ヵ月後になるそうです」

「知らせなくていいから」
「なんでですか？」怒ったように⑤声を尖らせた。
「靴が完成したってことで充分だから。賞を受けたくて作ったわけじゃないから。いいよ結果はどうでも」
「そんな……」
隼人が小池の腕を引っ張った。「栄造さんは結果を聞くのが怖いんだよ。もしダメだったら落ち込んじゃうでしょ。だからびびってるの」
「ガキンチョ、お前な――」
隼人は言った。「だからそっと教えて、僕に」
小池は頷いた。「わかった」
なんだよ。なんでもわかってるんだからって態度はよ。そんなに簡単な人間じゃないってのに。
徳永が大声で言った。「それでは皆さん、栄造さんの靴完成を祝いまして、ワルターさんの部屋にお食事を用意しております。皆さん、このまま場所を移動してください。三階ですよ。はい、どうぞ後ろの方から順次お願いします。お酒もご用意しておりますよ」
栄造たちはワルターの部屋に移動した。
六つのテーブルのうち、三つに食事と飲み物が並んでいる。大皿にはピザや巻き寿司がある。
栄造は一番奥のテーブルに座った。アトリエの住人たちが栄造に絶対優勝だとか、結果が楽しみですなと話しかけてくる。なんだよ、これは。うるせぇよ。恥ずかしいよ。だいたいお節介なんだ。なんで一足靴が完成したぐらいでパーティなんだよ。できたよ。独りだって。ちょっと力入れすぎて［C］になってただけだ。力を抜くことがわかったら、たいしたことはない。目を瞑ってたって靴はできる。それを手術が終わるのを待つように、ロビーでうろうろしやがって。ローストビーフってのはそんなに大層なもんなのか？　皆その皿に集まってるじゃないか。⑥隼人と直也に挟まれて、フライドポテトを摘んでる俺はどう考えたっておかしいよ。なんでこうなったんだよ。だけど――ま、いっかもな。

（桂望実『ボーイズ・ビー』より）

（九）　線部ｄ「恍惚の表情」の意味を説明した次の文の［　］に当てはまる語を、ひらがな四字で答えなさい。

心を奪われて、［　　］としている表情。

（十）　――線部④「なんだよ」とありますが、この時の栄造の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　問いかけに答えないまま二人が部屋を立ち去ってしまったので、靴の完成を喜んでくれているのか分からずに戸惑っている。
イ　靴が完成した喜びを分かち合えると思ったのに二人が立ち去ってしまい、肩透かしを食らったような気持ちになっている。
ウ　感謝の気持ちを二人に改めて伝えるつもりだったのに、二人がすぐに部屋から立ち去ってしまったので残念に思っている。
エ　靴がようやく完成したというのに、二人が喜ぶそぶりを見せないで部屋から立ち去ってしまったことに憤りを感じている。

（十一）　――線部⑤「声を尖らせた」とありますが、この時の小池の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　すばらしい靴を作ったのにも関わらず、栄造自身はコンテストの結果に興味がないと言うので納得がいかなかった。
イ　結果を聞きたくないとは予想もしておらず、それならば何のためにコンテストに出品したのかと疑問に思った。
ウ　多くの人が手伝ってくれたおかげで完成したのに、そのことをおろそかにするような栄造の発言に反発を感じた。
エ　この靴であればコンテストの優勝は確実であるのにも関わらず、自信を持てないでいる栄造の気弱さに腹を立てた。

（十二）　［C］に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　センチメンタル　　イ　パニック　　ウ　ルーズ　　エ　スランプ

（十三）　――線部⑥「隼人と直也に～ま、いっかもな」とありますが、この表現から分かることを次の文のように説明しました。［　　］に入る適当な言葉を考えて、二十字以内で答えなさい。

隼人たちのおかげで［　　］と栄造は思うようになった。